

覚園寺がなにを今、不服としているのか？みなさまに説明いたしたく、覚園寺の見解を料理屋さんの「暖簾」にたとえ、まとめてみました。

1218年、**本店**（**覚園寺前身 大倉薬師堂**）の**初代主人**（**運慶作の戌神将**）が作った料理（**仏さまの姿形**）に憧れて、弟子があつまってきました。その中の一番弟子（通称 辻の薬師堂戌神像 いま報道写真で掲載、展覧会出展・絵はがきで販売されている御像です）が、**暖簾分け**をしてお店（**二階堂東光寺**【**東光寺薬師如来さま**と共にまつられたと想像しております】）をもちます。

そんな矢先、**本店**（**大倉薬師堂 覚園寺**）で火災が起き、**初代主人**は亡くなります。時を経て、**本店**を復興するにあたり**二代目**（**現覚園寺戌神将**）は、その一番弟子をたずね、今は亡き**初代主人**の味（**仏さまの姿形**）をありがたいことに教えていただき、営業を再開します。以降、多くの方々の支えを頂戴して**本店**は、今日まで営業が続いています。

一方 **暖簾分け**したお店（**二階堂東光寺**）は廃業、一番弟子は、その後転々（**東光寺**↓**長善寺**↓**辻の薬師堂**↓**鎌倉国宝館**）とお店を渡り歩きます。そして現在、これまで仲が良かったはずなのですが、なんと一番弟子が

「実は、**本店**が掲げている**暖簾**（**義時公の夢**にでたという**伝承**）は私のものではないか、だって私しか**初代主人**に会ったことがないのだから、一番近い私に託されたはず」と言い始めます。びっくりした**二代目**は、「**暖簾**は、**初代主人**の形見です。それは違うのでは？あなたは、**本店**の主人にはなりませんでした。

なによりもご自身のお店の**暖簾**はどうされるのですか？」というのですが、

「**初代主人**に会ったこともない**二代目若造**に、興味はない、そう世間も認めてい

る」と今日、そのように情報伝播しつつある状況だと感じています。

本店としては、**初代主人**がいる、いないに関わらず、会ったことがある、ないに関わらず、なすべきことは『大事なものは形ではなく真心』と信じてこれまで以上に懸命に自身の背負う暖簾を掲げ、腕を振るうしかありませんが、神仏はすべてお見通し、こちらは黙ってなすべきことをなすという我慢は、できませんでした。

さてここからは、悩みなのですが、なんと来年度、一番弟子のお店（国宝館）に**二代目**来てよと誘われています。（国宝館から特別展示のために覚園寺戌神将を貸してくださいというお願いです。）

今、この状況で、あの店へ**二代目**が訪れて、**本店**にとっていいことがあるのか？返答悩んでいます。

通常、博物館から貸し出しの依頼があった場合、感情にまかせて断るのは慎重になるべきです。

ただ今回 国宝館所蔵の一番弟子から、覚園寺**二代目**にむかって

「私は、鎌倉時代の仏さまです。鎌倉時代の**初代**覚園寺戌神将さまをもっともよく知るのもあなたでなく私です。義時公が夢に見たであろう姿は、室町時代に作り直されたあなたではなく、私です。わかるよね」と意図している（意図主張される方々は、お寺の考えとは異なりますが、ご自身の知識見識を持ち文化財としての価値観と道理をもって判断されていると思います。批難はしません。）

そのように感じるのです、その見識を尊重し、世間が、端的に鎌倉時代の食材を活かした味を求めていると言われると、室町時代の私の出番はありません。

私は、行きませんとお返事できるでしょう。

鎌倉時代の味にこだわり満悦する考えも理解しますが、でもできればですが、鎌倉の味わいはそれだけではないはずです。

1296年、大倉薬師堂を覚園寺と名付けられた

開基 北条貞時公（九代目執権）、

開山 智海心慧和尚（初代和尚） はどんな気持ちをもっていたか？

鎌倉時代の幕を引いた

後醍醐天皇（覚園寺を勅願所とする）

足利尊氏公（現在の本堂再建者）が、なぜ

北条義時公ゆかりの大倉薬師堂・覚園寺を再建なさったのか？

室町時代すでに義時公の霊験の戌神将の姿をどう再現すべきか？の問いに朝祐仏師の出した結論が今の姿です。どんな思いを辻の薬師堂の戌神像さまから教えていただいたのだろうか？戦中戦後懸命に覚園寺境内をまもってくださいました方々もいらつしゃいます。今日までの、その土地その場所の歴史に思いをはせて、皆さまには、覚園寺をそして鎌倉を味わっていただきたい。そう願います。

覚園寺が、鎌倉国宝館の特別展示に協力するか否か。覚園寺の役員と

これまで覚園寺に関わってくださいました多くの方々のお気持ちと当代住職は、

もう一度向き合い判断、機会をみてお返事いたします。

この文章は、現在 覚園寺が知り得る知識をもとに作成いたしました。今後新たに史実が発見されれば検証し、改めるべきは改めます。 合掌